

**東京都児童相談センター 治療指導課
特別臨床セミナー講演会
治療的施設ケア：トラウマを背負う子どもとのかかわり」**

日時：2013年10月31日（木）

9:30～12:30

場所：児童相談センター新庁舎 研修室

講師：パトリック・トムリンソン氏

（トムリンソン・コンサルタント事務所長）

通訳：辻 直美（吉香kk）

司会：伊東ゆたか 治療指導課長

記録編集：開原久代

配布資料：1.「エビデンス情報と成果にも

とついた里親ケアのモデル」2.「トラウマ

を背負った子どもたちと心をかよわせるに

は」 3.英国マニュアル「英国における

里親のリクルート」（以上 Tomlinson 氏提供資料

を開原久代翻訳）



司会：本日の講演会は、準備の期間が大変短かったのですが、皆様お忙しい中を多数ご参加下さり、大変嬉しく思っております。講師のトムリンソン先生は、10日間の講演活動のなかで、本日が最後の日ということではありますが、これまでのご経験に踏まえて、いろいろ伺えることを楽しみにしております。私が平成9年に児童相談センターに赴任した時に技術次長でおられた開原先生がこの研究活動を企画されております。開原先生、パトリック先生についてご紹介お願いいたします。

開原：ご紹介ありがとうございました。私は、昭和50年に児童相談センターが開設された時に着任し、治療指導課長として発達障害児の通所指導や、昭和60年（1985年）からは宿泊治療で当時、注目されていた不登校の子どもたちの治療指導ということに取り組みました。当時は不登校という主訴でくられた子どもたちでしたが、今、考えてみますと、ほとんどが発達障害や虐待体験のある児童だったわけですが、当時は、学校に行けない子どもを支援しようと一生懸命取り組んでおりました。その後、伊東先生をはじめ多くの先生方が治療指導部門を発展させ、こちらに移っても立派に存続できていることは、皆様のお蔭と本当に嬉しく思っております。

私は児童相談センターを定年退職後に大学教師立場で厚生労働省の科研費研究に応募し、念願だった、「被虐待児を養育する里親や施設職員への専門的支援」について3年間の研究活動を行うことが出来ました。海外と国内の関連する調査研究を18人の仲間と行い、その課程で、本日お招きしましたトムリンソン先生が開発された英国の重いトラウマを体験した子どもたちの治療施設を訪問したり、昨年と本年、先生をお招きして重いトラウマを背負った子どもを養育する施設職員や里親さんとの交流会や講演・ワークショップを開催しました。私が調査訪問した英国の治療施設は、5人の子どもに10人の治療親が配置されているというグループホームで驚きましたが、トムリンソン先生はもともと、治療的コミュニティといって、今で言うと少年院的な大変なトラウマを背負い、犯罪を犯すような少年たちの施設の施設職員を長年なさり、

その後施設長やスーパーバイザー、コンサルタントのお仕事を重ね、治療的ケアに関する著書もたくさん出版しておられます。ご著書の一つを私どもが翻訳し、本日チラシで案内をさせていただいております。明日、帰国されますが、伊藤先生のご尽力で皆さまにお忙しいなかをお集まりいただき、トムリンソン先生のお話を聞いていただく機会を得られたことを、本当に感謝いたします。ではよろしくお願ひいたします。



トムリンソン：ありがとうございます。それでは本日3時間というお時間を頂戴しておりますが、皆さまにこういう形でお話をさせていただく機会を得まして、大変嬉しく思っております。それでは1時間ほど前半の部分をお話させていただいて、その後休憩を取りまして、後半に入っていきたいと思いますが、適宜、皆さまからの質問をお受けし、ディスカッションのお時間を取りたいと思います。

「コミュニケーションをとるとは？」

では、このトラウマを負った子どもたちと心を通わせる、コミュニケーションをとるというのは、どうやって実現すればいいのかということを少し考えていただきましょう。どういう意味なのか。ちょっと写真をご覧ください。



ここにはお母さんと赤ちゃんの写真がありますが、これをご覧になって皆さまどういふふうにお感じになっていきますか？何が起きていると捉えられますか？非常にシンプルな質問ですが、どなたかお話いただけますか？そちらからお願いしてよろしいですか？

女性1：目と目を合わせて、お互いに微笑みあっています。

トムリンソン：他にどなたかいらっしゃいますか？

一緒にいて幸せそうに見えるでしょうか？親子でお互いに理解し合っているように見えますか？この写真をお見せした理由は、お母さんと子どもの中で、何かコミュニケーションが取られているということをお見せしたかったのです。赤ちゃんが生まれた瞬間から、こういう形で親子の間でコミュニケーションというものが、すぐ始まっているわけです。もし、このお部屋に赤ちゃんがいたとすれば、我々もすぐにコミュニケーションを取り始めると思いますね。ふつうだったら微笑みかけたり、赤ちゃんは笑ってそれに応えたり、何かちょっと音を立てたらそれに対して私たちが同じように対応するかもしれません。それをどうい

ふうに表示するかというと、赤ちゃんをあやしているお母さんというのでしょうか。こういうプロセスを介しましてどんどん、赤ちゃんの脳が発達していくわけです。赤ちゃんが泣き始めると、すぐにお母さんの表情が変わることもおわかりいただけだと思います。ですからトラウマを負った子どもたちとのコミュニケーションを取るということを考える際に、ここでご覧いただいているような赤ちゃんとお母さんとの間で、とられているコミュニケーション、これは特に言葉を要しないものであるということ念頭にとどめていただきたいと思います。また、トラウマを負った子どもたちは実年齢よりもかなり幼いままとどまっていることが多いのですが、これは発達に障害を負うというか、発達が損なわれてしまうことによって、そういう状態になるということでもあります。

この写真をご覧になってどのようにお感じになるのか、どういう写真だと思われるか？どなたか。



女性2：同じ姿勢になっているので、同じ

気持ちになっているのかな？

トムリンソン：そうですね。同じような姿勢になっているので、同じような気持ちになっている。非常に興味深い点をご指摘いただきましたが、おそらくこの二人の中で、何かつながりがある、ポジティブな意味で何かつながっていることが示されていると思います。髪型も似ています。おそらく父親と子どもであろうということで、その子どもが父親に肯定的な気持ちを持っていることが伝わって来るかと思います。これを、子どもたちを虐待したことのある若者に、この写真を見せたところ、どういう答えが返ってきたかと言うと、この男の人が子どもを森の中に連れて行って、そこで虐待しようとしている写真だと言うのです。ですから人によっては、この写真から肯定的なイメージを受ける人もいれば、逆に子どもを虐待しようとしている大人なんだというふうに捉える人もいるのです。

あるワークショップで、子どもを保護する仕事をされている職員の方たちに、同じようにこの写真をお見せしたところ、こうやってビーチに来ているけれども、父親はショーツをはいていて、子どもはビーチにいるような恰好をしていない。ということで、これはネグレクトのケースではないかと言っていました。

ですから、皆さん、いろんな視点があるということで、コミュニケーションに関しても、例えば先ほどの母親と赤ちゃんの間で交わされているような言語を介さない、非言語のコミュニケーションを取っていることがありますし、また言葉を使っているようなメッセージを伝えているということもあります。それをどのように捉えるか、本

当に様々な視点があるということです。

「トラウマを受けた子どもたちの反応」

ご存知かと思いますが、トラウマを受けた子どもたちは、自らを取り巻く環境に非常に神経をとがらせています。これは自らそれだけ危険な環境に置かれていたということ。自らを守る、身を守る術として、そういう感覚が身に付いてしまったといえます。取り巻かれているいろんな脅威とか、リスク、危険なもの、虐待から身を守るためにそのようになってしまったのです。

ですから、トラウマを受けた子どもたちと何かやり取りをするときには、言葉を使って何か話しかける以外にもあらゆる場面でコミュニケーションを取っているわけです。

関連したことで、今、私自身が施設で仕事をしていたときのことを思い出しています。ロンドンに出かけたときがあって、戻るための列車に乗り遅れてしまったので、駅で一晩過ごさなければならないことになりました。7時半から仕事を始めなければならないので、6時発の列車に乗らなければいけなかったのですが、非常に寒い駅で一晩過ごして、ほとんど眠れないままで早朝から子どもたちの勤務につかなければならなかったのです。すでに職場に着いたときには、あまり機嫌が良くなかったわけです。さらに5分後には、そこにいた施設の男の子が、台所で何か食べ物を私に向かって投げつけてきました。私としては、言葉は何も発していなかったのですが、その男の子はすでに私の気分を察知していたのではないかと思いました。そもそもあまり機嫌が良くないということで、もう家に帰ったほうがいいのではというところまで気づかれ

ていたと思います。やはり子どもたちは大人の動向に非常に敏感ですので、何か大人が落ち着かないとか、心配を抱えていると、ものすごく反応してくるのです。特に集団の中の子どもたちは。大人がそういう状況にあると、非常に難しい行動をグループの中でとることがいろいろと明らかになっています。特に大人が問題について話をしたわけではなくて、言葉によって、何かを伝えただけではないのですが、別な形で私たちの心の中が、感情のコミュニケーションが何かが伝わっていたことになります。

「相手を知るためのトレーニング」

ですから子どもに、何を言おうか、どう言おうかということを考える以前に、言葉を介さないコミュニケーションが何も言葉を発しなくても、子どもたちに何を伝えているのかをまず考えるべきであります。

また、私たち自身も耳を傾ける、そしてきちんと観察をするという姿勢を持っていないといけません。やはりコミュニケーションでより重要なのは聞くということだと思います。耳を傾けるということですね。イギリスにおいては、児童心理療法家になる場合の最初の重要なトレーニングは、赤ちゃんを観察することです。まず子どもたちに携わることで、最初のトレーニングを受けるわけですが、最終的にはトラウマを受けた子どもたちの専門家になるためには、まずやらなくてはならないのは観察することなのです。子どもたちを観察すること、これを「幼児観察」と呼んでいます。訓練を受ける受講者は、例えば親子を、週2回、1年間を通してずっと家庭訪問して、ひたすら観察するということです。特に何かそれについてコメントをしたり、言葉を

発したりするわけではなく、黙ってただひたすら観察をするということが続けます。例えば、今週でも来週でも結構ですが、職場にお戻りになったときにちょっと練習だと思って、いつもよりもっとつぶさに子どもたちを観察していただければと思います。

本当に注意を払って、細かいところまで見ていくことです。どれだけの気づきがあったか、観察した結果ではとすようなことがあるかということを経験していただければと思います。

「一人の子どもに集中的に注目」

私が治療的施設であるコミュニティで仕事をしていたとき、男子だけの施設でしたが、特に非常に気にかかる子どもがいました。5～6人のケアラーが職員でいましたが、その週はずっとその子について観察をして記録を取りました。通常よりもよりその子にフォーカスを当てた形で、ずっと目を向けているというような状況でした。本当にその子が行ったすべての行動について書き留めていました。そして我々職員がそれに対してどのように対応したのかということも含めて書きとめました。例えば朝、起床の時間から、なかなか起きてこない。それに対して私たちは何て言ったのか。どういう状況だったのかをつぶさに詳細事項を記録していきました。そうすると後々詳細なコミュニケーションで、その子とどういうやり取りがあったのかということが見えてきます。

では、どういうパターンで、コミュニケーションが取られていたのか、ということを経験として残して、後で振り返ることができるわけです。そういった記録がまとまってくると、コンサルタントも入って、一

緒にチームとして、そのケースを検討していくことができます。非常に興味深い点ですが、我々が記録を取り始めて1週間ぐらい経つと、子どもの行動自体が変わってくるのです。でも、もちろんその子には我々が1日の終わりにその子の行動を記録していることは知らせていないのです。チーム全体として、その子の行動に注目して、いろんなことを一緒に考えていくことを繰り返していく中で、突然1週間ぐらい経つと、子どもが変わってくるわけなのです。あたかもその子が、皆が注目してそういう記録を取っていることがわかっているかのように、本当に行動が変わるのです。これは、通常よりもより注意を払ってもらえていることを感覚的に捉えたからだと思うのです。

特にある子どものことを覚えています。ふつうでしたら私と全然話をしない子でしたが、この活動を始めてから、私にひっきりなしに話しかけるようになったのです。おそらく、その子は私のほうの受け入れ態勢がより整っていたことを感じたのだと思います。

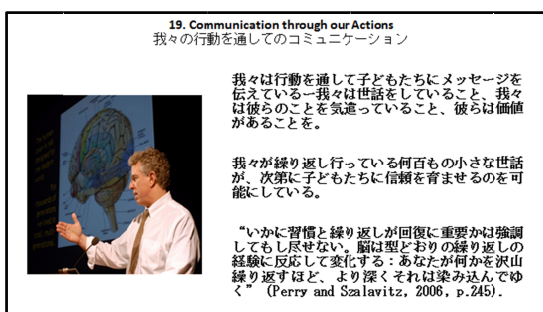
「厳しい役割」

ですからコミュニケーションを子どもと取っていくにあたって、我々にそのコミュニケーションを受け入れる態勢があるのかということが非常に重要となってきます。トラウマを負った子どもに関して難しいのは、彼らがそのコミュニケーションを取りたい内容というのが往々にして、我々にとって痛みを伴う内容であるということなので。本当に大変な、目を背けたくするような内容のコミュニケーションであるので、それが非常にコミュニケーションを取るうえで困難な点になるのです。

ですからトラウマを負った子どもたちと私たちが効果的にコミュニケーションを取れるようになるためには、我々自身が自分たちが経験してきたこと、体験してきたことを共有できる場が必要になってくるのです。例えば、スーパービジョンであったり、ミーティングであったり、という場が必要になります。

「耳を傾け、聞くこと」

アメリカの神経科学者ブルース・D・ペリーという方のコメントを紹介したいと思います。彼の言葉で自分が学んだ一番の教訓は、とにかく注目 attention して、耳を傾けて、聞くこと。何か他のことをする以前にそのための時間をとっておくことが、より重要だというのが、自分にとって教訓だったという言葉を残しています。脳生物学的にミラーリングという事象がありますので。



ですから相手を落ち着かせたいと思ったときには、まず向き合う自分自身を落ち着かせて、そういう感覚を取り戻すというのが最善の方法であると思っています。そしてその子に注意を傾けるということですね。そういう視点からその子にアプローチをかけることです。そういうやり方をすると返って来る反応が全く違ったものになります。これが問題なのであろうと前提を置いて、何とか対処していこうとアプローチす

ると、今のように非常に注意を払って、子どもに目を向けたときとまったく違う反応が相手から返ってきます。ですからこの父子の写真を見て、おそらくこういう状況なのであろうと言うことは簡単ですが、一般の子どもとのコミュニケーションであれば、非常にシンプルで状況を把握しやすいかもしれないのですが。トラウマを負った子どもの場合は、往々にして異なり、実のところ、非常に混乱するような、非常に複雑なものである場合が多いのです。

「言葉への思いがけない反応」

また、トラウマを受けた子どもたちは、皆さんが発する言葉自体を誤解する傾向が強いということです。ですから、こちらはそういう意味で言ったのではないという場合でも、まったく違う理解をしてしまうのです。それが往々にして後でまた混乱を招き、ぶつかってしまう原因になりがちなのです。

ある男の子が朝食のときにグズグズしていて、なかなか早く支度が出来ないということで、もう学校に行かなくてはいけない、遅れそうだよという状況がありました。その子に「ちょっと急がないと学校に遅れるよ」と言ったのです。そうすると、数秒後にはその子はパニックを起こしまして、大騒ぎになってしまったのです。物理的に体を取り押さえないと、15分ぐらい、その子を押さええていないといけないようなパニック状態に陥りました。私としては本当に困惑してしまいました。ただ、早く朝食を食べ終えて、早くしてと言っただけなのにこういうパニックに陥ってしまったのです。その後その子の成育歴について、ファイルに入っている情報に目を通したのですが、

成育歴を見て、わかったことは、その男の子は実はお母さんが「早く朝ご飯を食べなさい!」と言ったところ、ちょっとグズグズしていたということで、怒って棒のようなもので、その子の頭を殴ってしまったのです。病院に連れて行って頭の傷を縫わなければいけないくらい、非常に大きなケガをしたという経歴を持っていました。

ですから容易にご想像いただけるかと思いますが、私は朝食を食べて欲しいと思って、「食べてください」と言っただけで、こういうトラウマを伴う記憶を呼び起こしてしまったのです。こういうトラウマを受けた子どもたちはトラウマ自体が脳の中に蓄積されている状況なので、何かひとつの言葉でも、臭いでも引き金となって、そのイメージが喚起されてしまうのです。その部分について、子ども自体は意識していない、無意識のうちにそういう状態になっているのかも知れません。ですから、そういうトラウマが喚起されたのだということを子ども自身は理解できていないかも知れません。子どもたちはその体験について何か話ができる状態にいないのです。もしかしたら意識的な記憶の中には残っていない体験かもしれないのです。

「乳幼児期のトラウマと脳の発達」

特にそのトラウマ自体が2、3歳ぐらいの非常に小さな幼児期に起こってしまった場合です。重要な点としては、多くの場合、子どもたちがトラウマを負う経験をしたのは、かなり幼児期の段階に起こっていると言えます。もちろんその後、もう少し大きくなってからもトラウマ体験というのはあり得ますが、往々にして2、3歳まで乳幼児の時期が多いかと思えます。発達段階

の中で、乳幼児というの一番、最初の2、3年ぐらいが脳の発達が急成長を遂げる時期ですので。そういった時期にトラウマを受けると、これはネグレクトも含まれますが、非常に深刻なネグレクトを乳幼児期に体験してしまうと、これもやはりトラウマ体験になってしまいます。脳の発達には、このブルース・D・ペリーが述べているように、順番があります。順次、脳が発達して次の段階にいくまでにある程度決まった順番があるということを言っています。ですから段階を経て、徐々に脳が発達していくわけですが、赤ちゃんのときから、1ステップずつ踏んで、順番を踏んで次のステップに進んでいくという脳の発達が行われていきますので。次の段階を飛び越して、またその上にいきなり飛んでしまうことはできないわけです。ということは、トラウマを受けた子どもたちは、脳の発達が妨げられているわけですから、その先の段階に進めないまま、止まってしまっている状況で大きくなってしまったということです。

皆さま、ご経験されている方もいらっしゃると思いますけれども。ですから実年齢10歳の子でも、発達の段階から言うと本当に、2～3歳のレベルに留まっているという子もいます。ですから、その子どもたちとのコミュニケーションを考える際に、情緒的に妨げられてしまったというか、ちょっと遅れてしまった子どもたちというのは、実際の年齢が10歳であれ、14歳であれ、関係ないのです。機能的にはもっと幼いレベルに留まっているということです。ふつうの10歳、14歳の子に語り掛けるような調子でコミュニケーションを取ろうとしても、まったくうまくいかないという

ことになってしまいます。ですから、ふつうだったら10歳の子は、こういう反応を返してくるなというような期待をもってコミュニケーションを取ろうとしても、彼らの発達段階の上では実年齢とまったく違った段階にいるわけですから、そういう形ではコミュニケーションは、うまく機能しないのです。

「まず安全の確保と共感を」

ですからトラウマを負った子どもたちとコミュニケーションを取ることが目的なのであれば、ブルース・D・ペリーが言っているように、まず忍耐が必要だと。そして十分に時間を取らなくてはいけないということですね。何よりもまず安全を確保してあげるといことです。トラウマを負った子どもたちは、自分たちは安全だと思わなければ決してコミュニケーションを取ろうとしません。ただ、子どもたちが安全だと感じてもらえるまでに半年～1年ぐらいの時間を要することがあります。ですから自分は安全だと感じられるようになると、その子にかかっている負荷も軽減されてきますので、そうすると少し考えるということが出来る余裕ができてくるのです。そうするとコミュニケーションを取り易くなっていくということで、以前の状態だと少し緊張感があり、無理している状況ですので、あまり集中することができないのです。まず危険から身を守ることに神経を使っていますので、とてもコミュニケーションを取る余裕はないわけです。まず安全だと感じてもらえるまでですが、非常に大変な試し行動の時期などを経て、やっとそういう安全を感じられるようになるということなのです。ですからある程度、線引きを

してあげるといいますか、子どもは非常に恐怖感をもっているのです、虐待されていたかもしれないということを我々はわかっていますので、ここは安全な場所なんだよと、伝えることにより、我々としても共感を示すことができます。その子に懲罰的な態度を取るのではなく、共感してあげる、その思いをわかってあげるといことが、まず安全を感じてもらうための第一歩だと思えます。

「人間の否定でなく、行動に焦点を」

その子を人として否定するとか批判するのではなく、その行動にチャレンジするといことが大事です。トラウマを負っている子どもたちは、往々にして親とか周りの人から「お前は悪い子だ」と言われて育ってきた子が多いのです。お前のことは嫌いだとか、好きじゃないと言う言葉を浴びせられて育った子が多いのです。ですからその子に対しては、「そういう行動は取って欲しくない」、「そういう態度に出るのは好きじゃない」というふうな言い方でその行動に焦点を当てて、語っていただきたいのです。例えば、「それは人を傷つける行為だからよくない」と。「君は人を傷つけるから、君のことが嫌いだ」とか、「好きじゃない」と言うのではなく、行動のほうに焦点を当てて、言っていただきたいと思えます。

また、共感を示す言葉としては、「怒っているのはわかるけれども、それでも人を傷つけるのはよくないことだよ」ということで、共感を示しながら、言葉を選んでいただくと。これは言うは易しといいますが、シンプルなことのように聞こえますけれども、本当に現場でトラウマを抱えた子どもたちとやり取りをしている中では、そうい

ったシンプルな言葉がけでも、大変複雑なものになります。

例えば、人を傷つけるのはよくないと言われたけれども、「じゃ、どうして自分の親は、自分のことを傷つけ続けていたんだろうか」というように疑問を持ってしまう子どももいます。親によっては、その子どものことを「愛しているよ」と言いながら、一方で虐待をしている親もいますので。そういう意味でその子は愛情と傷み、虐待といったものをごちゃ混ぜにして、同じようなものだというように一括りに考えていることもあるからです。

例えば、里親の方が、自分の実の子どものように「愛しているよ」という言葉をかけるかもしれません。子どもはそれを聞いて将来的に自分は虐待されるのではないかと、思ってしまうかもしれません。言おうとしていることは、我々が発する言葉が、子どもにとってどういうふうに聞こえているのかというと、我々が想定しているものとまったく違う捉え方をされていることが往々にしてあるということです。

非常に誤解されやすいということです。

「トラウマを受けた子どもへの言葉かけ」

ですから、トラウマを負っている子どもたちとコミュニケーションを取るときのアプローチとしては、出来る限り子どもたちが我々の言葉をどのように捉えているのかということに注視しながら。まずこちらが話すよりも相手の言うこと、子どもたちの言う言葉に耳を傾けることが大事です。より余裕をもってオープンな形で受け入れる態勢をとって、聞いてあげるというアプローチがよろしいかと思えます。話をするという事は、同時に考えながら話をするわ

けですから、その分、脳も使って、非常に複雑な動きをしているのです。赤ちゃんと話すときは、そんなに複雑な話はしませんので、単にあやしているようなところですが、徐々に幼児ということで発達していくわけです。まだ子どもたちが幼い時は脳が十分に成熟していませんので、4～5歳になるまでは、なかなかそううまく話ができない状態です。ですから、ある程度はシンプルなレベルからスタートしないといけません。例えばその子どもたちに対して、どうやって感情をコントロールするかということですが、ある程度、子どもたちの感情に共感しながら、何か心配そうだなというときには、「何か心配事があるの？」とかそういう形で相手の気持ちに共感しながら、対応すればいいかと思えます。

「気持ちの表現への手助け」

ですから自分自身の感情をちゃんと表現することができるように、子どもたちを手助けあげます。トラウマを負っている子どもたちは、往々にして非常に言葉で感情を表現することが苦手ですので、「幸せな気持ち」と「怒った気持ち」というように名前を付けてあげるなど、感情を表現する術を教えてあげることも大事です。



英国のリチャード・ローズという方はトラウマを受けた子どもたちに対するライフ・ストーリー・ワークを研究しています。

このライフ・ストーリー・ワークの最初の段階で、例えばゲームを使って、どういふふうに関係表現をしていくのかということとを学んでいくということもやっています。

例えば笑顔はどういう気持ちなのかな、ということ、悲しい気持ちだったり、怒った気持ちだったり、それぞれに名前を付けて、感情表現をさせるということをやっています。ライフ・ストーリー・ワークでなくても、何かカードなどを使って、その感情にいろいろと表現しやすいような名前を付けてあげると、コミュニケーションを取る能力といったものがだんだん育ってきますので、非常にシンプルな形でもコミュニケーションが取れるような形になってきます。

「子どもたちは大事な会話が出来ない」

私が最初にトラウマを受けた子どもとの仕事を始めた頃、ひとつ気づいたことは、そういう子どもたちというのは何も重要なことを語ってくれないということを感じました。例えば、自らの生い立ちのことだとか、自分に何が起こったのかというような重要なことについては、子どもたちは語ろうとしないのです。そういうわけで、私は、自分が未熟なのでそういう話を引き出すことができないのではないかと感じてしまいました。重要なことについてと申し上げましたけれども、日常生活の中でもトラウマを受けた子どもたちとの会話のなかで、そういう大事なことについて話し合うことができるかどうかというのは、非常に大事なことだと思います。

こういう虐げられてきた子どもたちは、家族と過ごしていた時期に、あまり会話がなかった子どもが多いわけなのです。いろいろと研究者のほうからも結果が出ていますが、発達の中、普通の親子の会話が非常に重要な役割を果たすということがわかってきております。その家庭のなかでシンプルなことでも、遊んでいる時でも、ちょっとお昼寝をした時でも、食事を与える時でも、ちょっとしたことに会話がうまれて「何か悲しそうだけど、どうしたの?」とか、「これはいいね」とか、本当に小さなことでも、些細なことでも、いろんな会話をすることが子どもの発達において重要だということわかってきております。傷ついた子どもたちというのは、そういう会話が非常に少ない環境のなかで育ってきていることが多いかと思えます。

「予期可能な日常生活の提供」

子どもたちがちゃんと vocabulary をつけてもらえるようにと、そのサポートをすると、日常生活の中でどんどん語彙が増えてきて、将来何が起こるのかということとを予測しやすくなってきます。ですからトラウマを受けた子どもたちにとっては、何が必要かと言うと、信頼できる一貫した、安定した環境のなかで過ごすことができるということが必要になっております。ですから将来的に何が起こるのかということとを予め予期して想定のなかで動けるような周囲の環境が必要だということとです。ルーチンということで、日常の定期的な事象が起こって、より安全だと感じることであれば、ストレスも下がってくるということになりますので、そうすると、愛着形成ですとか、周りとの関係性を構築するということとでも

きやすくなってきますし、また、考える余裕が出てきます。そして、より重要なことについて、コミュニケーションを取ることもできるようになってきます。

それでは、こちらからお話を続けてきましたけれども、何かここまでのところでご質問のある方いらっしゃいますでしょうか？

男性1：貴重なお話、ありがとうございます。さっきお話があった、一貫した環境が必要というお話でしたけれども、よく児童養護施設等では、職員の入れ替わりとか、居室が変わるとか、年度替わりに環境が変わるといったことがよくありますが、そのことについてどう思われるかお聞きしたいのです。

トムリンソン：非常に重要なポイントだと思います。まず、コミュニケーションのお話をするとき、全体の中での、文脈の中でどういう意味合いを持っているのかということに注意を払っていただきたいと思います。そうでなければ、言葉そのものとかのテクニックは、役に立たないからです。どういう流れの中でコミュニケーションが取られているのかというコンテキストが重要になってきますので、まず、そこには事実関係も含まれますけれども、コミュニケーションというと、非言語のコミュニケーションも含まれます。そこには、聞く、耳を傾けるということもコミュニケーションの一環であります。そこで養育に携わっているケアラーの方が、今私がコンテキストと言っていますが、その全体の流れの中の、非常に重要な役割を果たしている方が、そこが常に変わっている、入れ替わりが激し

いのであれば、当然コミュニケーションを取る上で妨げになってしまうかと思います。

安定した環境の中であれば、ある程度の変化というのは、プラスの面もあるかと思いますが、ですから、たとえば、スタッフの方の入れ替わりがあまり過度なものでなければ大丈夫ですが、その入れ替わりによっては、子どもにとって今まで世話をしていた方、自分の人生にとって重要な方を失ってしまうという問題にもなり得ますので、そういう問題について話し合うことが大事かと思います。ただ、そういう変化があまりにも頻繁に起こり過ぎてしまうと、あまりいい影響は出ないと思います。当然我々がコントロールできない、どうしようもない事情が多いかと思いますが、できる限り予測可能な環境を作ってあげることが重要だと思います。できる限り、サプライズを減らしてあげるといえることですね。子どもにとっては、たとえば、何を食べるのかということも重要なのです。本当に、今日は、ご飯は何なのかということを知りたがっている子どもたちもたくさんいますので、私が勤務していた施設では、一週間のメニューを壁に貼り出して、水曜日のご飯は何が出てくるのか、木曜日はどういうメニューなのかということをお知らせしていました。また、スタッフの勤務シフトに関しても、今日はどのスタッフが来るのかということが子どもにわかるようにしていました。ビジターが来るのであれば、それもわかりやすく、明確に知らせるようにしました。子どもたちには、将来が予測可能なものであり、想定できる範囲で毎日流れていくという環境が重要なのです。できる限り、そういう情報を子どもに伝え

るようにしていました。もし、職員がその場を去る、異動するというのであれば、2、3カ月ぐらい前に、子どもたちにも知らせるということで、その感情と向き合う時間を与えるようにするのがよりいいかと思えます。というのは、ある職員の方が別のところに行かれるということで、その子どもたちが持っている過去の喪失体験とか、過去においてそういう変化を経験したときの記憶が戻って来る可能性がありますので。

非常にいいご質問いただきましたが、ほかに何かご質問のある方いらっしゃいますか？

男性2：ケアワーカーなど、大人側からは、子どもたちの環境をコントロールしてわかりやすいものを作れるかと思いますが、子どもを育てていく中で、子ども同士の関係は、なかなか予測がつかないことがよく起こると思います。そういうところにケアワーカーがどういう形で介入して、わかりやすい生活の枠を作っていったらいいのか、何かあれば、教えてください。

トムリンソン：ちょっとご質問の趣旨の確認ですが、子ども同士の関係というのが、ときには難しいものになったりとか、非常に混沌としたものになったり、予測不可能なものになってしまう時に、ケアワーカーがどういう形で入っていけばいいのかというご質問でよろしいですか？(答え：OK)

まず、子どもたちができるだけ仲良くできるように、子どもたち同士の関係を改善できるように、ケアワーカーとしては何とかサポートをしていこうというわけですが、まず最初に見ていただかなくてはいけないのは、ケアワーカー同士の関係です。

子ども同士の関係が映し出しているのは、往々にして、ケアワーカーの方々同士の関係を反映していることが多いのです。ですから、ケアワーカー同士がいろんな情報交換などコミュニケーションをとる機会や意見が異なる場合には、それぞれの意見を述べる機会が必要になってきます。非常にオープンで、率直にいろいろと意見交換ができるような場が定期的であればよいと思いますし、どなたか第三者が入って、ミーティングに参加して、サポートするような場があれば望ましいと思います。

先ほど申し上げましたように、子どもたちは、非常に敏感ですので、ケアワーカー同士の関係の中で緊張感が走ると、すぐにそれを察知されてしまいます。そこは重要な出発点で、すべてのケアラーの方たちは、子どもたちのお手本になっていると思いますので。ですから、ケアワーカー同士がどういうふうに折り合いをつけているのかということが、子どもたちにとっても、互いにどういうふうに関わっていくべきなのかということを示す一番の模範になるかと思えます。お互いに敬意の念を持って分別のある態度で、直接的に模範行動を示す立場になるのではないかと思います。

「子どものミーティングの試み」

私が、トラウマを負っている子どもたちの施設で仕事をしていたときに非常に重要だと考えて、子どもたちも参加するようなミーティングというか、一緒にいる場を作りました。ときには、日に2、3回ぐらい、ただ一緒にいて話をするだけですが、週に2、3回というときもありましたが、ケアラーと子どもたちが共に過ごして話をするという機会を持ちました。これは、カルチャ

一的に通常行われないうことであれば、現実的にはそれを実施していくのは大変なこともかもしれません。

こういう形で定期的に、トラウマを受けた子どもたちと話をする場を設けたわけで、たとえば、毎日30分とか45分という時間を設けることにして、そういう時間をとるよということを伝えると、子どもたちが非常に不安を持ったことがあります。彼らの経験上、大人と子どもたちが話をすることは、悪いことにつながるという体験を持っていますので、何を話せばいいのかということに心配し始めます。

よく覚えていることでは、10人ぐらいの子どもと、2、3人のケアラーでミーティングをしたときに、私が司会をしていたのですが、子どもたちは本当に心配でしょうがないという感じで、落ち着かない様子で、ザワついてきました。10人の子どもたちが一斉に椅子をバンバンたたき、叫び始めるという状況になってきました。子どもたちが、叫んだり、暴れ始めたので、「君たち暴れたいんだったら、そこで暴れていてもいいけれども、自分たちはトークン・セッションを始めるので、そのまま暴れ続けるのであれば、どんどん時間がなくなるよ」と言いました。一人の子が窓を開けて、窓から飛び出してしまったんですね。1階の部屋でしたが、2、3分後には、残りの4の子がまた窓から外に出てしまいました。すぐに、庭中、あるいは施設の中を走り始めたのですが、私は部屋の中で座って待っていましたが、戻って来た子が、靴を私に投げつけてきました。あと2、3の子は泣き始めました。そういう状況に皆さんが遭遇しないことを願っております

が、トラウマを受けた子どもたちと接していく仕事というのは、そういう事態も起こり得るということです。これだけ大騒ぎになる、大きな問題になる状況も想定されるということで、本当に混沌としたような状態から、ある程度まとまった状態に持って行くまでに、こういうパターンが変わってくるまでに6カ月から1年かかる場合があります。大人としては、このホームの中でコミュニケーションをとって、お互いに話をしてゆきたいと思っていても、子どもたちはありとあらゆる嫌がらせをして、脅迫して、それに抵抗してくるのです。

大人たちが確固たる決意を持って、我々のこのホームの中で、みんながコミュニケーションをとれ、安全な環境の中で話ができる、そういう場を作るという強い決意を持っていなければやれないことなのです。

重要な点としては、相当数の子どもが虐待を受けていたり、また、性的虐待を受けていたりするので、その虐待の結果どういふことになるかということ、非常に秘密主義的な性質になってしまったり、拒絶につながっていくのです。虐待が起きている環境というのは、虐待そのものを否定する、そして、秘密裡にそれが行われるという環境なのです。ですから、虐待が起こる全く反対のところに、オープンなコミュニケーションが可能な環境があるわけです。

トラウマを受けた子どもたちというのは、往々にして、自らが育ってきた虐待的な環境を再現しようとしてます。私たちも児童心理療法のセラピストの先生と話をしまして、おそらく10人の男の子を一堂に会してミーティングをするのは難しいであろうということを言われました。我々は、その10

人を3、3、4で小グループ化して分けていきました。3人の子どものグループにひとりのケアラーが付いて、週に3回ぐらい、30分間話をするセッションにしました。話題は何でもいいので、とにかく30分間みんなで話をするということで、難しい話をする必要はないということで、とにかく話をして、相手の言うことに耳を傾け聞くということに慣れてもらうということを重視したセッションを実現させました。これは定期的に、ホームの中で実施し、飲み物とかビスケットとか軽食を用意しました。できるだけ子どもたちにリラックスしてもらえるように、ストレスを軽減して、お互いにプレッシャーを感じずに話ができるようにしていきました。一つのグループでは、小さなグループに分けても話し合うのが非常に難しいという子がいました。その子は、「僕じゃなくて、テディ(熊の縫いぐるみ)に話をさせてもいいか」と聞いてきました。これは、イギリスでは通常行われることですが、今言った男の子たちというのは、情緒的にはまだ幼い子どもたちでしたので、それぞれが縫いぐるみを抱えて話に加わるような形にしました。そのテディベアを通じてお互いに話をしていたわけです。実際このトラウマを受けた子どもたちとのやり取りというのは、間接的に行われることもあります。たとえば、遊びを通じてとか、音楽だったり、お絵描きだったり、そしてテディベアのような縫いぐるみを通して、コミュニケーションがとれるということを改めて痛感しています。

先週調布学園にお邪魔したときに、子どもたちのパフォーマンスということで、そのときもやはりコミュニケーションという

のが、演劇や音楽、お絵描きなど、いろいろな形態の取り組みがされていました。調布学園の子どもたちは、和太鼓を演奏してくれましたが、大きな音を出して、リズムに乗っての演奏で、子どもたちも楽しんで演奏していました。職員の指導で、かなり長い時間をかけて子どもたちが練習を積んで演奏してくれたということですが、音楽を通じての自己表現というのが子どもにとって非常にいい表現方法であることが示されていました。

どのように介入していくのか、関わっていくのかに関して言えば、お互いに話ができるという期待が持てる状況を作り上げることです。もちろん、そこにはある程度の敷居があって、その枠組みの中での話し合いということになります。もちろん、子どもたちの行動というものはある程度管理されなくてははいけませんが。

子どもたちが非常に難しい行動を取ってくるようになったり、混沌とした状況になることもありますので、先ほどお話ししたように非常にシンプルなレベルで話し合いを始めるということで、あまり早いスピードでの進展は望めませんが、6カ月から1年ぐらいをかけて、その施設の中でも話ができる文化を作り上げるということで、お互いに忍耐強く対応していく必要があると思います。

それでは、5分程度休憩を取って再開したいと思います。

(休憩時間)

トムリンソン: それでは、再開したいと思います。残り1時間ほどとなりました。

資料をお配りしていますが、必ずしもその資料に沿ってはいませんが、この趣旨の内容でお話をさせていただいております。

ちょっと休憩時間に出た質問について、皆さんと共有させていただきます。

「休憩時間に出た質問から」

先ほど、休憩の前に、子どもたちが部屋の中で騒ぎ始めて暴れたという話をしましたが、その子たちの年齢は、8歳～14歳の男の子でした。

もう一点のご質問は、もっと年長の子どもたちの場合どういうふうに対応したらいいのかという質問を受けました。私の答としては、その子の実年齢ではなくて、発達段階のどのステージにその子がいるのかということのほうがより重要だと申し上げました。非常に重要なのは、すべての子どもたちがどういう発達段階にいるのかということとをきちんと評価するということです。情緒的にどういうステージの発達段階にいるのかということとをまず理解しなくてははいけません。先ほども申し上げましたけれども、人間というのは、その段階を飛び越していくことはできないといことです。ある発達の段階で、その途上で止まってしまうと、そこにずっと居続けなくてはいけない、先に進むことができないこととなります。私自身も実子がおりますけれども、ときに、私が施設で対応していた非常に難しい10歳～12歳の子どもよりも、2歳の実子のほうが一部発達しているというか、もっと前に進んでいるなと感じたことがありました。

より年長のお子さんで、より複雑な話もできる、成熟した子どもであれば、それに合わせた、その子の目線でのコミュニケー

ションのレベルに設定してあげればよいと思います。

休憩時間にいただいたもう一つの質問は、ケアラーが非常にストレスを感じて、疲れ果ててきたというときには、どうやって対応すればいいのかという質問です。先ほど私、自分自身のこともお話ししましたが、自分が疲れて職場に行ったときに、すぐに子どもが気付いて、食べ物を投げつけてきたという話をしましたが、非常にこれは重要な問いかけです、トラウマを受けた子どもたちと一日中一緒に過ごしていると、当然ケアする側も疲れ果てて燃え尽きてきます。非常に要求されるものが多いので、当然ストレスを抱えてしまいますし、本当に疲れ果て、消耗してしまうと言っていいと思います。普通に親をしている場合にも共通点も多いかと思いますが、自分の子どもの世話をする場合も、いろんな要求に応えていかなくてはいけない、疲れる仕事で、ストレスも多いかと思いますが、実子では必ずしもいつも子どもに耳を傾け、聞く姿勢でいる必要はないのです。

「混乱した施設の事例」

一度、別の施設から、悲鳴が上がり、非常に大きな問題を抱えていて、スタッフもその状況に圧倒されて、手に負えない状況にある、ケアラーの方々が大変な思いをされているということで、私にその施設を見に来て欲しい、サポートして欲しいと要請を受けたことがありました。一つ気付いたのは、施設の管理者の方、マネージャーの方が、いつも落ち着きなく、慌てふためいている方だったのです。ご自身の身なりもあまり整っていない。髪も整っていないですし、シャツも半分はみ出しているよう

な感じで、靴のひももほどけているような、本当にワサワサしたような感じの方だったのです。実際に職員の方々とお話をさせていただいた中でどういう印象を受けたかという、明らかに普通期待できるような supervision がなかったり、ミーティングもキャンセルされてしまったりとか、というような状況が明らかになってきました。スタッフの方からも非常に不満の声が上がってきました。非常に疲れ切っている、消耗して大変な思いをしているという不満の声が続出していました。そういった気持ちについて、マネージャーの方にどういうふうに伝えていたのかと質問したところ、そのマネージャーの方は、ご自分が十分に問題を抱えているので、私たちの気持ちに耳を傾ける余裕はないという答えが返ってきました。何度か、毎週行われている定期的なチームミーティングに参加しました。これは、朝の7時半スタートですが、非常に興味深い、ある意味非常に混沌としたミーティングに参加することになったのですが、会議の開始時間を誰もはっきりわかっていなかったのです。姿を見せない方も何人かおりました。まだ来ていない職員の方を捜しに行った方もいまして、自転車に乗って来た方もいました。私はそういう状況の中で、10分から15分ぐらい待たされていました。チームのミーティングに来た方の中には、お茶を飲もうということで、ティータイムが始まった状況です。ですから、本来であれば、チームの方がコミュニケーションを取る唯一の場であるはずのところ、非常に混沌とした雑然とした状況となり、コミュニケーションをあ的環境の中で取るのは不可能であろうという状況でした。

まず最初に我々が取り組んだことは、大人の間を決まりをきちんとする、その敷居をしっかりと付けたということです。まず、子どもたちにあれこれ言う前に大人の間でけじめをきちんとつけることができなければいけないということを明らかにしました。トラウマを受けた子どもたちが必要としているのは、信頼できる、予測可能な環境であるので、当然そこで世話をする職員の方々にも、そういった環境を提供できる支援体制が整っていないわけではいけないわけです。まず最初に、チームミーティングが7時半にきっかり始まるということをアナウンスしました。もしお茶が飲みたければ5分前に来て、ミーティングの妨げにならないようにして下さいということを周知させました。次のミーティングは7時半開始ということだったわけですが、飲み物とかお茶の準備をするために間に合うようには来られなかったのです。ただ、7時半スタートということに皆さん合意しましたねということで、7時半に始めました。ミーティングが始まると、ちょっとお茶が飲みたいという人もいましたが、ほかの方で、お茶を飲みたかったらもっと早く来ればよかったのにと人もいました。それで、飲み物を取りに行った人もいましたが、残り半分くらいの方はそのまま着席してミーティングを続けました。大人同士の間でも落ち着くまでしばらく時間がかかったわけですが、いずれ状況としては整理されていきました。

今の話というのは、先ほど申し上げたように、職員の方同士の働き方が、非常に子どもたちに大きな影響を与えるといういい例ではないかと思えます。

休憩時間にどなたかおしゃっていたのは、施設で複数の養育者が関わる中で、お互いに大勢とコミュニケーションを取らなくてはいい環境よりも、里親家庭でしたら、里親だけとコミュニケーションを取っていただければいいので、そういう意味で、やりやすいのではないかというお話がありました。

養護施設において、チームを組んだ職員同士が本当にコミュニケーションを一貫して取れているのかということ。大人の職員の方がそれぞれの子どもに関して、本当に情報が行き渡って周知徹底されているかどうかということが課題ということでした。

「職員へのサポート」

先ほど例に挙げた施設では、明らかに職員の方も子どもたちも、「自分たちの声には誰も耳を傾けてはくれない」という状況がありました。マネージャーの方があまりにも忙しく、自分は忙しいのだという、そういうメッセージを周りに与えていたわけですが、もう問題を抱え過ぎていて、耳を傾ける暇なんかないという管理者の方の状況でした。私は、子どもたちの置かれた環境を改善するための第一歩として、最初にこのマネージャーの方をサポートしなくてはいけないということが挙げられてきました。子どもたちとのコミュニケーション、子どもたちのケアを改善していきたいと思うのであれば、その前に、まず、手始めにケアラー、職員の方、若しくはその上司のマネージャーの方、この大人たちのお互いの意思疎通とか関わり方を改善することで初めて子どもたちのケアが改善していくということです。

ブルース・ペリー、先ほど引用した方の言葉ですが、「子どもたちのケアを改善した

いのであれば、まず子どもたちのケアをしているケアラー、職員の方をケアしてあげなくてはいけない。」とっています。

今申し上げたように、ケアラーの方が子どもたちとのコミュニケーションに大きく関わっているということで、そこでいろいろな難しい問題もありますので、それについて少し考えてみたいと思います。

「転移と逆転移」

皆様の中には、転移とか逆転移という言葉をご存知の方もいらっしゃると思いますが、子どもの過去が、我々に影響するというので、かなりインパクトが大きい場合があります。ですから、子どもたちから、あたかも皆さんがその子を虐待してきたかのように扱われることもあるのです。

これは、トラウマを受けてきた子どもたちというのは、世話をしてくれる人に対して、あたかもちゃんと世話をしていないかのように、「いい人じゃないんだ」とか、「何でそういうことまで干渉するんだ」というような、世話をしてくれることに対して全く感謝していないことを、言葉でなくてもメッセージを発信することがあります。

そういう対応をされると、どうしてもそれが負担になって、圧倒されてしまうことがありますし、自分はこの仕事に向いていないのではと感じる人も多いと思います。実際にそういう理由で離職される方も多いかと思います。ケアラー自身が希望を失い諦める状況になったときには、子どもたちの感情をある意味反映しているとも言えます。ですから、皆さんご自身の感情、気持ちについて考えるということも重要なのです。ときに、子どもたちが何を伝えようとしているのか、言葉を必ずしも使わない、

非言語のコミュニケーションであったとしても、皆さんの感情というのは、子どもから何が伝わってきてそういう気持ちになったのかということを考えることも重要です。ここで難しいのは、自分たちの考え、自分たちの気持ちとか感情について話をしたりすることが非常に難しいということです。最終的に、子どもたちに、そういった抱えている気持ちを言葉で表現できるように持って行きたいわけですが。

「職場を離れるということ」

気持ちを行動で示すのではなくて、やはり、お手本となるべきは自分たちですので、自分たちの感情、気持ちについて、お互いに話し合うことから始めなくてははいけません。ですから、気持ちをきちんと言葉にして語ることができればできるほど、それが行動となって示される可能性は低くなってくると思います。

これは重要なポイントなので、少し考えてお話ししたいと思います。

この職場を離れようという決断をされた方がおられたとすれば、それはある意味、act out と言いますが、行動でそれを示そうとしていた現れかもしれません。子どもたちもトラウマを受けています。育児放棄されたり、拒絶されたり、自分は望まれない子だというトラウマを持つ子どもたちの気持ちというのは、ケアラーが離職することによって、新たにそれが行動となって、改めて自分は見捨てられた、拒絶されたということになるわけです。

養護施設の職員の方の離職率を効果的に改善する、若しくは里親を辞めたいという方の割合を減らしていく効果的なやり方の一つとして、大人同士のコミュニケーション

の質を高めるということが挙げられるかと思えます。

ある施設（グループホーム規模）では、5人のスタッフの方がいましたが、1年間で、そのうち4名が離職したというケースがありました。また、そこでは、コミュニケーションの質を高めようということで焦点を当てて取り組み、チームミーティングを開催し、ちゃんと信頼できる方の指導を得て、supervision を得ることによって、職員の方一人一人の指導をしていったということがありました。その結果、劇的に状況が改善し、離職率もかなり減りました。年間、4名の方が離職されていたような施設でしたが、それが年間1名辞める程度にまで改善していきました。その結果、子どもたちにどのような影響が出たかということ、子どもたちの関係も良くなってきたということで、子どもたちもお互い仲良くできるようになってきました。

「相手の意見をよく聞くこと」

子どもの養育に関わるということは、そもそも疲れる仕事でありまして、それが自分の子どもであっても子育てというのは本当に疲れ果ててしまうことだと思いますので、時々、ご自分の伴侶若しくはパートナーの方や、同僚の方と気持ちを共有することができれば、状況は何も変わらなくても少し気分は良くなると思います。

誰かが聞いてくれて理解してくれるというだけでも、感情的なところでは改善すると思います。養護を受けている子どもたちというのは、往々にしてこれまで誰からも耳を傾けてもらえなかったという子が多いので、その子の言うことを聞いてあげるだけでも、非常に大きな変化であるわけです。

トラウマを負った子どもたち、特に自分がコントロールできない状況の中で、大きな、強い大人に虐待されたということで、自らなす術もなく、本当に怖い思いをしたわけです。子どもたちが回復を遂げる過程の中で、まず、いろんな選択肢を与えてあげるということが一つ挙げられるかと思います。日常生活の中で自分の意見を聞いてもらう、自分たちの希望を叶えてもらえるということ、自分が選択権を持っているということが、resilienceにつながるということになります。

「レジリエンス」

Resilience レジリエンスという言葉について補足しますと、これまでの世界観というのが、自分たちがコントロールできない世の中だと思っている子どもが、トラウマを受けている子どもたちの中には非常に多いので、その考えを持ち続けてしまうと、大変なダメージが生じてしまいます。

17. Resilience 回復力

絶えず側にいて心をくわいてくれる大人の存在は、人生早期に心身を害する状況に屈服していたであろう子どもたちに、きわめて元気づける影響をもたらす。レジリエンスという考え方は、子どもの発達や、発達に混乱を伴った子どもたちがどう回復するか理解の中心となっている。

社会的養護を受けるまでに多くの子どもたちは無数の危険因子に曝されている。子どものレジリエンスに基づく仕事は、子どもが持つ力と肯定的な面の確認に焦点をあてる。

ギリガン (Gilligan 2000) は、レジリエンスの3つの源を、安全基地、自尊心、自己治癒力と特定している。

教育の成功は、子どもたちに逆境の体験を克服し、レジリエンスを強めるという最も明確な方法のひとつとなることが出来る。独立した生活に移行する前の教育の成功は、明確な成果と相関することが明らかにされている。

18. The following key points have been found to promote resilience
下記の要点がレジリエンスを強める

- 強力な社会的支援ネットワーク
- 少なくとも一人の無条件で支えてくれる親か親の代理の存在
- 確かな守り体験 - 子ども教育の達成を支えることは、長期にわたりレジリエンスと確実な成果をもたらす上に大変重要
- 克服する気持ちと自らの努力が違いを生み出すという信念
- 様々な課外活動の参加
- 感情的な影響ばかりでなく有益なことも認識されるように、逆境を乗り越える能力
- 他人を助けることで“違いが生じる”能力と確信
- 挑戦的な状況からは避難するより、むしろうまく処理する力が育つように支える

そうした活動には下記のことが含まれる

- 動物の世話をする
- スポーツや他の余暇活動
- 表現と創作芸術
- アルバイトやボランティア活動

社会的権限の活動は、その中に含まれる特別な技能だけでなく人間関係の能力を築くにも役立つ。そうした活動は、正常な生活を送るもたらすので、アンクリン (Anglin 2002) は社会的養護下にある子どもたちに大変重要であることを見出している。

自分たちが影響力を持つことができる日

常生活の中で選択肢があるのだ、自分がコントロールできるのだという感覚を与えることが非常に重要でレジリエンスに繋がります。また、子ども同士仲良くできるかどうかということも、回復において非常に大きな意味を持っていますので、小さな子どもたちの間でうまくやっていたら、成長してからもいい結果が出ていることがわかっています。

今日はいろんなトピックスについてお話が飛びましたが、ここで、ちょっと面白いスライドをお見せします。

Projection 投影



これは投影という題になっていますが、おそらく右側の方がケアラーかと思いますが、若い男の子が話をしています。ここで何を男の子が言っているかということ、「いつも自分は黙れ、黙れと言われてきた。誰も自分のことを聞いてくれない。あなたもどうせそうでしょう？」と言っています。「僕に黙って欲しいんでしょう？」と言うのです。実際のところ、この反対側に座っている男性は、黙って聞いてあげたいと思っているのですが、男の子は全くそれと逆の反応を示しています。本当はこの子は何を言おうとしているのか。

もし、私がこの反対側に座っているケアラーであれば、自分自身の気持ちについて、

まず考え始めるかと思えます。私に対してどういう言葉が返ってきているのか、どういうコミュニケーションが取られているのか。たとえば、ボディ・ランゲージですね。体が示しているコミュニケーションは何なのかということ、まずとらえようと思えます。自分の気持ちとしては、段々イライラしてきたり、嫌な思いになっているかと思えます。おそらく、それは、その子が感じている気持ちと同じような感情ではないかと思えます。相手の子どもも、ちょっと怒りを感じてきたり、イライラしてきたり、若しくは心配な気持ちになっているかもしれません。誰も自分の言うことを聞いてくれないということで、イライラを募らせているのかもしれません。そういう気持ちになっているのであれば、「何か大事なことを言いたいのか」と言葉をかけるかもしれません。どうやって、その子の声に耳を傾けてあげられるかということで、このスライドを取り上げました。一方で、もし私が非常にストレスを抱えていて、あまりきちんと考えることができない状況であった場合、次のスライドのような反応を返すかもしれません。

Projective Identification 投影性同一視



これは、「黙れ！」と怒鳴っているのですが、この男の子が想定した通りのシナリオとなったのです。ケアラーはそう言ってしまうと、おそらく後で後悔し、本当はそういうふうにするつもりはなかったのに、悪かったなと後悔するかもしれません。これは、少年の気持ちが相手に投影されたのです。ここでは、その子は、あまり居心地のいい状態ではない、違和感を感じているような感情だったのです。この子が、相手に対して、目の前にいる人にも同じような感情を抱かせようとしたのです。出発点は、その子どもが抱いた感情であり、それが、私たちのほうに移って来て、それを act out する、行動となって表れてしまうということになります。これは、自分たちの感情、気持ちについて考える力を失ってしまった時に起こることですが、トラウマを抱えた子どもたちとコミュニケーションを取るときには、必ず自分たちの気持ちを振り返る、そして、自分たちの行動とか、自らが発する言葉について、振り返ったり考えたりする能力を必ず維持していかななくてはなりません。

この例では、子どもに対して、「黙れ！」と言ってしまったのですが、子どもから返ってくる反応は、「どうしちゃったんですか？」「機嫌が悪いね？」と言われるかもしれません。ある意味、今の一連のやり取りの中で子どもが満足感を得るかもしれないのです。そもそも自分が抱いていた居心地の悪い感情を相手に投げることによって、そこで取り込んでもらえたということですから。

何かご質問ある方いらっしゃいますか？

女性3：先ほど、職員のチームを作る上で、すごく有益なお話を聞かせてもらいましたが、そのスタッフの期待値とか、チームを作っていく上で、子どものケアをするためのスタッフですので、そこを踏まえた上でのやり取りをされたのかなと想像するのですが、先生のおっしゃっていた期待値のところを、もうちょっと具体的に教えていただけたらと思います。

「養護施設の職員のあり方」

トムリンソン：養護施設の職員の有り方については、その施設のトップのリーダーシップが非常に重要になってきます。1970年代、80年代、英国において、施設内で虐待を受けた子どもたちの事例が取り上げられるようになり、政府が大掛かりな調査に乗り出し、英国内の養護施設の調査を始めました。そこで、施設の中で、子どもたちに効果的な対応をしていた施設とそうでない施設の差が明らかになってきました。重要な違いをもたらす要因として、最近の研究の中でもいくつかわかってきていることがあります。まず、挙げられたのがリーダーシップです。このリーダーシップといいますのは、施設を運営するに当たって、きちんと効果的に、管理能力と言いますが、指導能力が働いているかどうかということで、最初にまず、施設の職員の方に対して、適切な支援を与えているかどうか、そして、ちゃんと方向性を示して、道筋を示した上で指導をしているかどうかということが挙げられています。リーダーシップは、ときに、周りに対して確固たる態度を示すということも一環としてあるかだと思います。ですから、明確に何を期待しているのかを示すのがリーダーシップの資質の一つである

かだと思います。これは、必ずしもマネージャーだけの仕事というわけではないと思います。たとえば、2人のケアラーの方が一緒に仕事をされて、より経験を積んだシニアの職員の方のほうがリーダーシップをとって、こういう期待値を持っているということをはっきりと示していく、あるべき姿を示していくということをしていくべきだと思います。また、職員の方も、子どもに対して何を期待しているのかということをはっきりと示していくことも必要です。

「施設の中に築かれた文化」

もうひとつ、施設において、非常に肯定的な結果につながったことのひとつとして、確固たる文化を作り上げていくということです。どういう意味で、確固たる文化と言うかですが、やはり、その施設の中では、どういう行動を取れば、どういう結果に結びつくのか、そして、その理由はどういうところにあるのかを明確に理解して、それを浸透させることが、きちんとしたカルチャーを作り上げる土台になるかだと思います。それに基づいて、子どもたちが、きちんとした分別のある行動を取り、そのために、職員の間、チーム間の基盤となる文化が必要になってきます。そういうプラスの文化的な基盤がある施設を訪問すると、たとえば、3、4名の方といろいろな話をして次に、個別に職員の方とお話した場合に、よい形で運営されている施設であれば、どなたとお話しても同じような、一貫性のあるメッセージが返って来ると思います。一方で、そこまでカルチャーが浸透していない施設であれば、聞く人、聞く人で違う答えが返って来るので、その場に身を置くことが混乱を招いてしまうような場になっ

てしまうかと思えます。大人の私でも混乱してしまうような環境であれば、それが、トラウマを受けた子どもたちにとってどういう環境であるかということは、容易にお察しいただけるかと思えます。既に混乱したところから出発している子どもたちです。

「終わりにあたって」

時間も迫って参りましたが、最後に申し上げたいことは、私にとって、皆様とお話しさせていただく機会というのは大変実りのある、興味深い時間になっておりますが、私の話も、皆様にとってご参考になればと願っています。

こういう形でお話させていただく時には、当初想定していたことと違う方向に話が発展していくことがあります。ときに、皆様からいただくご質問の内容で話が方向転換することもありますし、また、進めていく中で、いろんなアイディアや考えが浮かんで、そちらの方向で進行するということもあります。

お話の最後で、やはり出てくるのは、トラウマを抱えている子どもたちとコミュニケーションを取るということと、世話をする職員同士、ケアラー同士でコミュニケーションを取るということとはつながっております。我々同士、大人同士がコミュニケーションを取る、それが子どもたちとのコミュニケーションにも反映されますし、また、子どもたち同士でのコミュニケーションにも反映されてゆきます。まず、原則として、肯定的なコミュニケーションを確立する基盤を整えていくということが、非常に有益かと思えます。注意深く傾聴することです。また、注意深く観察すると

いうことも挙げられます。あくまでも、オープンな姿勢でー、あまり判断を下したり、批判的な態度を示すとうまくいかないことが多いと思えます。特に、トラウマを受けた子どもたちというのは、本当にギリギリのところにいるので、あまり批判的な目で見られるとうまく機能しないと思えます。やはり、思いやりを持った姿勢で対応していただく必要があります。トラウマを抱えている子どもたちは、あまりうまく考えることができない、考え巡らすということが非常に難しいので、思いやりを持って、その辺を配慮してコミュニケーションを取ることです。先ほども、あまり子ども同士仲良くできなかつたり、お互いにちょっと分別がない形で行動を取ってしまったという話をしましたが、皆さまも是非機会がありましたら、先ほどから引用しているブルース・ペリーさんの書かれた本（B.D.ペリー、M.サラヴィッツ著 戸根由紀恵訳「子どもの共感力を育てる」紀伊国屋書店 2012年）をお目通しいただければと思えますが、子どもたちに分別ある行動をとってもらいたいのであれば、自ら分別を持つ必要があると、彼は語っています。子どもたちにとっても、ただ行動を修正するために罰するというだけではなくて、そういうやり方ではなくて、きちんと子どもたちが納得できるような形で理性を持った説明をする、そういうアプローチをとっていただきたいと思えます。

それでは、本日はお引きいただきまして、ありがとうございます。また、10日間に渡る招聘で開原先生に、こういう機会をいただき、皆様にお話しさせていただいたことを感謝申し上げます。ありがとうございます。

した。

司会：有難うございました。では、トムリンソン先生と通訳の辻さんに拍手で感謝したいとおもいます。（拍手）

最後に、当センターのかつての次長である開原先生がこの会を設定して下さいましたので、開原先生にも拍手をお願いします。（拍手）

〈以上終了〉